日本IT書紀

037 女性は太陽

03 未剖篇
巻之四 曙光

佃 均

© 2004 TSUKUDA Hitoshi (Licensed under CC BY NC ND 4.0)

本作品はCC-BY-NC-NDライセンスによって許諾されています。ライセンスの詳しい内容は
https://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/deed.ja でご確認ください。

第三十七

女性は太陽

一

大正デモクラシーを彩取ったのは、女性の社会進出だった。

男子による相伝が社会契約の了解となったのは十二世紀から十三世紀にかけてであって、長い人類の歴史にあってはぐっと近世のことである。

女性は実名を残していないだけであって、起居を差配し、文芸を創作し、家督の継承を左右した。

女性が表立って活躍した時代は歴史が動いたときである。例えば飛鳥・大和における推古、皇極、斉明、持統、元明、元正の歴代女帝をはじめ、橘大郎女、額田王、蘇我倉山田姪媛、平城京における藤原光明子、橘三千代、阿部内親王、藤原薬子などがいる。

戦国乱世の終局には、信長にあって道三の一人娘・帰蝶、秀吉にあって木下寧々、あるいは信長の妹・市の忘れ形見である茶々、徳川家康にあって瀬名姫あるいは阿茶、前田利家にあって松などの名前を挙げることができる。

二十世紀に入って女性の意識を変革した法制度は、おそらく普通選挙法であろう。選挙に際して財産・納税額・身分・教育・信仰や教養などによって制限を設けず、一定の年齢に達した者全員が平等に選挙権・被選挙権を有するという、こんにちの目からすると至極当然のことが明治末期から大正にかけては国家の大事として議論された。

衆議院議員選挙法の第五条に

①帝国臣民タル男子ニシテ年齢二十五年以上ノ者ハ選挙権ヲ有ス。
②帝国臣民タル男子ニシテ年齢三十年以上ノ者ハ被選挙権ヲ有ス。

と明記されたのは一九二五年のことだが、女性はその対象から外されていた。しかしそうであればこそ、女性たちはより強く自身の拠って立つ場所を求めた。

われわれは前節でその実態をすでに見た。

米の高騰に立ち上がったのは、まず主婦たちであった。

――米を安く売れ。

と迫る〝女軍〟に

――うちは商売やけん、売るも売らぬも勝手じゃろう。

と言い返したのも米屋の女房だった。

彼女たちにとって毎日の食事と子どもの養育は他に代えることができない大きな至上命令だった。中には米や野菜の入手に悩み果て、真冬というのに襟元をはだけ、冷水を浴びる母親まで出た。土饅頭を茶碗に盛って子どもに食べさせようとした女房もいた。精神に異常をきたすほどに死に物狂いであったといっていい。

都市で暮らす女性にも意識の変化が起こっていた。表面的な装いに限ったことではあったにせよ、封建的な制度や慣習からの離脱を象徴していたといっていい。全国的にみれば大半が長髪を髷に束ね和装で下駄であった中で、銀座の街を歩く女性の九九％までが断髪で洋装・革靴だったという調査が、端的にそのことを物語っている。

二

都会で暮らす若い女性の洋装化が一般的になったということは、彼女たちが生む次の世代は最初から洋装で育つことを意味していた。一九二四年（大正十三）に文化服装学院、二六年にドレスメーカー女学院が創立されたのは、こうした状況を背景にしている。あるいは女性化粧品の資生堂が業績を伸ばし、『婦人倶楽部』『主婦之友』といった雑誌が創刊された。

都市部では江戸以来「呉服店」を名乗っていた三越や松屋などが「百貨店」に姿を変え、カフェーやバーが誕生し、レビューや少女歌劇が大流行した。「モダン」「ハイカラ」という言葉は、すなわち底辺で女性の解放と結びついていた。

この下地となったのは、明治政府が外貨を稼ぐために奨励した紡績業の振興にあった。そこで働いた女性たちは『女工哀史』が示すように、すべてが恵まれた環境にあったわけではなかった（片や個室を与え学問を受けさせ婚礼道具を持たせて送り出した紡績工場もあった）が、女性が働くことで賃金を得るという社会的認識を定着せしめたことは間違いない。

それまでの家父長制の中での女性は、家庭に入って炊事洗濯育児に従事し、舅・姑に仕え、夫に従う家庭内労働力としてしか、その存在価値を認められなかった。ところが都市の発展が女性に職場を与え、その女性たちが都市の消費経済を支える構図が形成され始めた。

男が兵役に取られたので、電話交換や郵便配達、車掌、外交員、事務員、販売員、教員、記者などに女性が起用された。美容、洋裁、看護、タイピストなど女性ならではの仕事も発生した。のちに記すパンチカード式計算機の利用

においても、主に女性がカードパンチの仕事に従事した。こうした社会の動きを背景にしている。

さらに高等女学校への進学率が高まり、女性の知的欲求が刺激された。一九一八年（大正七）に東京女子大学が開校し、北海道帝国大学が初めて女子の入学を認めている。ただ、こうした動きは個々に展開されていて、女性の意識改革を定義し方向性を示す思想的骨格は用意されていなかった。

ここに三角錫子という女性が鎌倉女学校で教鞭を執っていた。

一八七二年（明治五）、石川県金沢の生まれというから、このとき三十八歳であった。女子高等師範学校（のち御茶ノ水女子大）を出た才媛であって、のち一九一六年、常磐松女学校（のちトキワ松学園）を設立した人物である。

その年の一月二十三日、逗子開成中学校（のち逗子開成学園）の生徒十二名が乗ったボート「箱根号」が、鎌倉七里が浜の沖合いで転覆した。学校に届出をしていなかったために、遭難の事実が判明するのに時間がかかった。

波間に浮かんでいた乗船者の一人、木下三郎を通りかかった漁船が救助し、小坪港に運んだ。彼は間もなく息を引取ったが、その末期の言葉から初めて事実が知られた。

小坪の昌平寺に救援本部が設置され、葉山警察署逗子駐在所、鎌倉警察署らが捜索活動を始め、横須賀警察や地元の多数の漁夫も捜索に加わった。しかし遭難者を発見することはできなかった。翌二十四日には横須賀鎮守府から駆逐艦も派遣されたものの、何も発見されなかった。

二十五日の午後になって行合川の沖約二キロの波の底に、徳田勝治が弟の武三を両腕にしっかり抱き、小学生だった末弟が兄の首にまつわりついて横たわっているのが引き上げられ、その近くからさらに二遺体が発見された。北風が強まり、雪と濃霧で捜索は難航したが、天候が回復した二十七日、遭難から数えて五日にして全員が遺体で収容された。

事故から十五日後の二月六日は日曜日だった。

逗子開成中学校の校庭で行われた合同慰霊祭で鎌倉女学校の生徒達が鎮魂を歌った。三角錫子がジェレマイア・インガルスの曲に「真白き富士の根」の詩を添えた。由来は忘れられつつあるが、その曲と詩の美しさがいまもなお歌い継がれている。

三

もう一人、奥村明という女性がいた。「明」は「はる」

と訓む。ただし「奥村」の姓は洋画家・奥村博の伴侶となった一九四一年からの名乗りで、生家の姓は「平塚」である。

のち、「平塚らいてう」のペンネームで知られる。

一八八六年（明治十九）、東京に生まれた。父・定次郎は会計検査院の官吏だった。一九〇六年（明治三十九）、日本女子大を卒業したが、併せて津田英学塾に通い、国文学、哲学、宗教、英語、英文学になみなみならぬ才能を示した。五年後の一九一一年九月、日本女子大の同窓生四人と同人文芸誌『青踏』を創刊した。

その創刊の辞に彼女は

「元始女性は太陽であった」

と書いた。

この言葉から筆者などは邪馬台国の女王卑弥呼を連想するのだが、彼女がこう書いた由来も、あるいはそうであったかもしれない。自身、才能と能力にあふれ、自ら以て「新しい女性」を認じていた。

女子大を卒業した年の冬、東京帝大卒の小説家森田草平と駆け落ちし、那須塩原の尾頭峠に逃げた。当時、森田はすでに「夏目漱石の弟子」として知られていた。

――新進気鋭の小説家が、女子大を出たばかりの良家の子女と心中に走った。

マスコミにとってはこのうえない好餌だった。平塚らいてうを語るとき、この「塩原事件」が必ず引き合いに出されるのは、のちの森田に対するらいてうの態度によっている。

森田は一九〇九年、逃避行の様子を小説『煤煙』として発表した。これが好評となって、長編『自叙伝』をものし、戯曲『袈裟御前』などで作家の座を確定した。これに対して彼女は臆することなく所信を述べ、自分との恋愛事情を小説と称して暴露した行為を痛烈に批判した。その批判が彼女の名声を高めた、ともいえる。

青踏社は自我と自立の意識ある女性や女性解放の賛同者から熱烈な支持を受けた。この結社が支持を得たのには与謝野晶子や長谷川時雨が参集したことが要因として挙げられる。のち、市川房枝、奥むめお、高群逸枝といった女性解放運動家を育て、女性の社会的地位向上を果たすべく、治安警察法改正など法制度の改革に尽力した。

青鞜社に参加した女流作家のことを忘れることができない。

まず記すべきは小手川ヤエである。

一八八五年（明治十八）の六月、大分県臼杵市の造り酒屋の長女に生まれ、一九〇〇年（明治三十三）に上京して明治女学院に学んだ。二年後、同郷の野上豊一郎が一高に

入学してより以後、豊一郎を介して寺田寅彦、夏目漱石の知己を得た。女学院を卒後、ロンドン留学から帰国した豊一郎と結婚して姓を「野上」に改め、〇七年に漱石の紹介で『ホトギス』に短編『縁』『七夕さま』を発表した。

「野上弥生子」のペンネームで知られる彼女の白眉は、一九二二年に発表した『海神丸』であろう。

漁船が時化にあい、漂流する。飲み水もなく、食糧が絶え、死んだ僚友の肉を食べて生き残った漁師の話を、骨太に描く。おそらく男であれば、ああまで簡潔には描けまい。そこには夫豊一郎とともに探究した能の美学が潜んでいる。女性趣味的なロマンティシズムを拒否し、荒々しい人生を直視した筆致もまた、大正の精神であったかもしれない。

ちなみに野上豊一郎は東大卒後、九州帝国大学教授を経て法政大学教授、四六年学長、四七年総長に就任し、五〇年二月に六十六歳で没した。妻・ヤエは長寿を得て、百歳まで一と月余を残して他界。

野上弥生子と入れ替わりに青鞜社に加わった奥むめおは、父親の教育姿勢を『野火あかあかと』に次のように書き残している。

がんこな父だったが、わたしに女だから勉強しなくともよいとはひとことも言わなかった。

「東京では女ばかりで立派な本を出している者たちもいる。頭がよければ文学者にだってなれるし、器量が良けりゃ女優にだってなれる。ムメオがもう少し美人だったら女優にでもするのだがなぁ」とも言っていた。

貧しい行商人の家に生まれ、定まった家もなく、旅の空で住み暮らす中からも、女流作家が誕生した。野上にやや遅れて文壇に登場した林芙美子である。

明晰な頭脳をもって尾道高女を卒業した彼女は、貧困の中で創作に打ち込み、長谷川時雨の目に止まった。女性による女性のための『女人芸術』に掲載した小説『放浪記』がベストセラーとなった。暗い人生経験を日記体で記した小説が文学として評価される時代でもあった。

この章で筆者は、政治や経済や文化が、初めて大衆によって動かされた時代を描こうと考えた。政治や経済や文化は、〝かみよのかみ〟から十九世紀末まで一貫して、一部の特権階級に属する人々のものであった。彼らは大衆を常に、「無知蒙昧である」と規定することから出発し、また大衆も無知蒙昧でいるほうが楽であることを知っていた。

それが大正デモクラシーで変わった。「大衆の時代」が到来した。このことは、本書のテーマとは直接の関係を持

たないが、多くの読者は、「大衆の時代」が計算機の需要を顕在化したことを知っている。その端緒がこの時代にあった。

もう一つ、この時代は、次の歌どもにとどめられる伸びやかな精神を残した。

清水へ祇園をよぎる桜月夜
　　こよひ逢ふ人みなうつくしき

やは肌のあつき血汐にふれも見で
　　さみしからずや道を説くきみ

あるいは次の詩は、当時の男性から発されることがなかった。

あゝをとうとよ　君を泣く
君死にたまふこと勿れ
末に生まれし君なれば
親のなさけはまさりしも
親は刃（やいば）をにぎらせて
人を殺せとをしへしや
人を殺して死ねよとて
廿四までをそだてしや

与謝野晶子がこう謳った精神のことを、この節で書いた。

～～～～　補　注　～～～～

起居　ききょ：中華帝国における皇帝の日常生活の場。皇帝への面談（拝謁）が公式に認められない場合、起居の差配者や妃の側近者を介して私的に情報を提供したり文書を手交するなど、政治的な場として使われるようになった。

橘大郎女　たちばなノおおいらつめ／生没年未詳。万葉仮名の表記では「多至波奈大郎女」。敏達＝推古天皇の孫で厩戸王（いわゆる「聖徳太子」）の妃。厩戸王の没後、「天寿国曼荼羅繡帳」を作ったとされる。

額田王　ぬかたノおおきみ／生没年未詳。大海人王の妃となり、次いで葛城大王（天智天皇）の妃となった。万葉集を代表する女性歌人として知られるが、皇極朝から持統朝にかけて常に大王の傍にあった点で、決して装飾的な存在でなかったことがうかがわれる。

蘇我倉山田姪媛　そがノくらやまだノめいひめ／生没年未詳。乙未の変（大化の改新）で滅ぼされた蘇我宗家の分家・蘇我石川麻呂の娘で、中大兄王（のち葛城王：天智天皇）の妃となり、阿閇女王（元明天皇）を生んだ。

藤原光明子　ふじわらノこうみょうし／７０１～７６０。藤原不比等の娘で聖武天皇の皇后となった。母は橘三千代。藤原一族が天皇家の外戚として権力中枢を占めるきっかけとなった。悲田、施薬院などを創設した。聖武天皇没後は皇太后として発言権を増し「中台天平応真仁正皇太后」の尊号が贈られている。

橘三千代　たちばなノみちよ／？～７３３。県犬養氏の出自で美努王の妻となり橘諸兄を生んだ。のち藤原不比等の妻となり安宿媛を生んだ。安宿媛が首皇子に嫁いで皇后（光明皇后）となるに及んで「大夫人」の地位を得た。

阿部内親王　あべないしんのう／７１７～７７０。聖武天皇の娘で七四九年即位して孝謙天皇、のち七六四年重祚して称徳天皇。重祚後は道鏡を重任し藤原一族をはじめとする官僚貴族の反発を買った。

藤原薬子　ふじわらノくすこ／？～８１０。藤原種継の娘で平城天皇の寵愛を得て権勢を握り、兄の仲成と共謀して平城旧都への遷都を図った。八一〇年官位を剥奪されるに及んで平城上皇とともに東国に向かい兵を起こそうとしたが失敗し服毒した。

帰蝶　きちょう／１５３５～１６１２？　「胡蝶」のほか、「濃姫」（美濃の姫）「鷺山殿」（父・斎藤道三の鷺山城にちなむ）「安土殿」（安土城にちなむ）とも。斉藤道三の娘で織田信長に嫁いだ。尾張・美濃の連合を図ったが道三の後を継いだ斉藤龍興（さいとう・たつおき／１５４８～１５７３）に見切りをつけ、ついに美濃を織田家が制圧する画策に協力した。

本能寺で明智光秀軍と戦い信長とともに自刃したとされるのは後世の創作であって、天正十七年（一五八七）、織田信雄家中における高位な女性「あつち殿」、安土摠見寺蔵『泰巌相公縁会名簿』鷺山殿に「養華院殿要津妙玄大姉　慶長十七年壬子七月九日　信長公御台」と記されている。慶長十七年は一六一二年に当たる。

寧々　ねね／１５４８～１６２４。尾張織田氏の下級武士杉原家の娘として生まれ、木下藤吉郎（のちの豊臣秀吉）に嫁いだ。秀吉の出世とともに発言権を持つようになった。子がなかったため、秀吉没亡大阪城から退き京都の高台院に逼塞した。しかし秀吉子

飼いの郎党への影響力は絶大で、徳川家康は彼女の支持を取り付けるのに大変な努力をした。正夫人を意味する「北政所」、隠居地の名を取って「高台院」の異称がある。

市　いち／1547～1583。織田信秀の娘、信長の妹。東海一の美貌とうたわれ一五六三年近江浅井長政に嫁ぎ、茶々姫ら二男三女を生んだ。八二年越前柴田勝家に嫁いだが翌年秀吉軍が越前北の庄に攻め入ったとき勝家とともに自刃した。

茶々　ちゃちゃ／1567～1615。幼名は別に「野々」とも いう。秀吉の側室となり淀城に住んだので「淀君」と称された。一五九三年秀頼を生んだことから実権を握り、大阪城落城・豊臣家滅亡の原因を作った。

瀬名姫　せな・ひめ／?～1579。「築山殿」の異称がある。駿河今川氏の家臣関口家の出自で松平元信（のちの徳川家康）の正室となった。家康が岡崎に自立後、信長から甲斐武田氏に内通している嫌疑をかけられ、家康は抗しきれず殺害した。

阿茶　あちゃ／1555～1637。武田信玄の家臣飯田久右衛門の娘で今川氏家臣神尾弥兵衛に嫁いだ。一五八八年徳川家康の側室となり大阪夏の陣で徳川方使者を務めた。のち一位の位を受け「一位の尼」と異称された。「一位の尼」と異称された。

松　まつ／1547～1617。一五五八前田利家に嫁ぎ、秀吉による柴田攻めのとき夫利家に代わって秀吉との和睦に臨んだ。秀吉没後、徳川家からかけられた嫌疑を晴らすため自ら進んで人質となり十五年間も江戸で暮らした。加賀前田家百万石の基礎を築いた女傑とされる。利家没後、落飾して「芳春院」。

資生堂　一八七二年（明治五）、福原有信（ふくはら・ありのぶ／1848～1924）が日本初の洋風調剤薬局「開陽院診療所」として東京銀座に創業した。このとき併設して「薬局資生堂」を開いたのが起こりである。福原は海軍病院薬局長だったときに得た西洋の知識をもとに、医薬分業を実践した。資生堂の名称は中国古典『易経』の一節「至哉坤元万物資生」に由来する。この福原から大日本製薬、内国製薬、帝国生命保険が誕生した。

女工哀史　一九二五年、細井和喜蔵著。日清・日露戦争後、工場労働者の需要が急増した結果、貧農出身の若年女性が工員として採用された。女工は全工場労働者の六割を占めたといわれる。彼女たちは低賃金、苛酷な労働条件、粗末な寄宿施設と食事、罰金制度や強制貯金といった過酷な環境で労働に従事した。その実態を赤裸々に描写し、のちの労働条件改善運動の象徴となった。

日本女子大の同窓生四人　保持研子、中野初子、木内錠子、物集和子。

保持研子（やすもち・よしこ／1885～1947）は俳人として活躍した。

木内錠子（きうち・ていこ／1887～1919）は雑誌『婦人世界』記者だった。

物集和子（もずめ・かずこ／1888～1979）は二葉亭四迷、夏目漱石の指導を受け小説を発表した。

青踏　この名の由来には二つの説がある。一つは俳句の春の季語「青き踏む」で、新緑にあふれた春の野を歩くことを指す。「女性にとって冬の時代は終った」という意味が込められているという。

もう一つはヨーロッパで流行していた女性用靴下「ブルー・ストッキング」を直訳したとする説である。鹿鳴館時代に貴婦人たちが着用し、そもそも男性の礼装だったブルー・ストッキングを女性が着用することをもって婦人解放の旗印にした、という。

両説とも一定の説得力があるが、平塚らいてうはブルー・ストッキングから「青鞜」の名を思いつき、これに与謝野晶子が俳句の季語の意味を重ねたものらしい。

青踏社の参加者　このとき与謝野晶子はすでに歌壇で名を成しており、平塚らいてうは三顧の礼をもって青踏社への参加を要請した。晶子ははじめ平塚の申し出を辞退することも考えたが、「女性の自立」という平塚の言葉に動かされた。雑誌『青踏』創刊号には、晶子の文章が冒頭を飾っていた。

森田草平　もりた・そうへい／1881～1949。本名は「米松」といった。与謝野鉄幹が主宰する女子学生向けの「閨秀文学講座」で講師を務めたとき、平塚明と知り合った。

与謝野晶子　よさの・あきこ／1887～1942。旧姓は「鳳」本名は「志よう」といった。「与謝野」姓は夫・鉄幹（本名「寛」：1873～1935）の父・礼厳（れいごん／1823～1898）で、それを筆名とした。歌人としてデビューした当初は「鳳晶子」の名だった。政治評論もしばしば行い、シベリア出兵については「日本の領土的野心を猜疑され、日露戦争の外債による国民生活の疲弊を再び起こす」、教育改革では「各府県市町村に民選の教育委員を設けること」を提案した。

長谷川時雨　はせがわ・しぐれ／1879～1941。本名は「やす」（康子という説もある）といった。嫁ぎ先の「水橋」を名乗ったのこともある。劇作家として活動し、一九二三年、女性による女性のための文芸誌『女人芸術』を発刊、のちタブロイド判新聞形式の機関紙『輝ク』を創刊した。

市川房枝　いちかわ・ふさえ／1893～1981。一九一七年名古屋新聞記者となり、一九一九年「新婦人協会」を平塚らいてう、奥むめおなどとともに設立、併せて女性の結社を禁ずる治安警察法の改定を求めた。婦人参政権運動を主導したが、日中戦争・太平洋戦争の期間、国政に協力して女性の政治的権利を獲得するべきとして第日本言論報国会に参加、四七年公職追放ののち五三年の第三回参院選で当選した。

奥むめお　1895～1997。旧姓は「和田」、本名は「梅尾」で「むめお」と訓む。新婦人協会のあと一九二三年に「職業婦人会」、二八年「婦人消費組合協会」を立ち上げた。一九四七年参院議員となり、四八年「主婦連合会」（主婦連）の会長に就任した。

高群逸枝　たかむれ・いつえ／1894～1964。本名はカタカナで「イツエ」といった。一九三〇年平塚らいてうらと無産婦人芸術連盟を結成し、『婦人戦線』を創刊した。女性運動の傍ら、『母系制の研究』『招婿婚の研究』などをまとめた。

小説『海神丸』　実際にあった遭難事件をもとに描いている。野上は第二次大戦後、事件の人物と面会し『後日物語』を書いた。

林芙美子　はやし・ふみこ／1903～1951。本名は「フミコ」といった。恵まれない家庭環境で、幼少期から少女期に下関、長崎、佐世保、鹿児島、直方と転々し、十四歳のときようやく尾道に落ち着いた。二十五歳のとき長谷川時雨が雑誌『女人芸術』に掲載した小説『放浪記』が世に出るきっかけとなった。尾道本通り商店街（通称「芙美子通り」）西口に、芙美子のブロンズ像がある。

君死にたまふこと勿れ　一九〇四年（明治三十七）雑誌『明星』掲載。日露戦争のとき、新妻を残して旅順包囲戦に招集された弟・鳳籌三郎に送った。

日本IT書紀　037 女性は太陽

著　者：佃 均

発行者：（特非）オープンソースソフトウェア協会
http://www.ossaj.org/
info@ossaj.org

発行日：2023年4月10日

本作品は2004年-2005年ナレイ出版局より刊行された「日本 IT書紀」全5分冊を底本とし、原著者が一部改定を加えたものを複数の電子書籍に再構成して CC-BY-NC-ND ライセンスにより公開します。

© 2004 TSUKUDA Hitoshi (Licensed under CC BY NC ND 4.0)

本作品はCC-BY-NC-NDライセンスによって許諾されています。ライセンスの詳しい内容は https://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/deed.ja でご確認ください。